

機関番号：34514
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20530868
 研究課題名（和文） 保育士養成における実習日誌の記述力向上のための教材開発に関する実証的研究
 研究課題名（英文） Research on development of the teaching-materials to improve writing skills of daily reports in practical training
 研究代表者
 権藤 眞織（GONDO MAORI）
 神戸親和女子大学・発達教育学部・講師
 研究者番号：90413426

研究成果の概要（和文）：

本研究では、保育実習履修学生を対象に、実習日誌の日々の感想を記述する箇所をよく読み、カテゴリに従って記述内容について分類を行う分析学習を行った。その結果、事実についての記述内容に著しく偏りを示した学生では、記述内容の修正に効果的な傾向も示されたが、考察部分の記述にはほとんど影響が見られなかった。

研究成果の概要（英文）：

This study aimed to develop new self-learning program designed to improve writing skill of daily reports. College students who took part in a child nursing course participated in this study. We asked students to read their own daily reports and categorized in to several topics and count the frequency of appearance. This program was effective to improve writing skill for low skilled students. However, improvements of writing skill were not observed in consideration part of the daily reports.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学 教科教育学

キーワード：保育者養成、実習日誌、教材開発

1. 研究開始当初の背景

近年の少子化や核家族問題を背景として保育士には従来よりも高い専門性が求められるようになってきた。その一方で大学に入学してくる学生の基礎学力、理解力、社会性などの低下により、従来の教育方法ではその効果をあげることが困難になってきた。特に保育士養成の根幹となる「保育実習」（現場

で行う実習および養成校で実施する事前事後指導）では、元来、学生の動機づけのレベルや個人的な要因（不安や社会性などの高低）などのばらつきが大きく、実習の事前事後学習を集団で一斉に実施して、個々の学生に対して確実に教育成果をあげていくことは容易ではない。このような現状で、教育的な成果を挙げていくためには、より効果的な

教育プログラムや教材の開発が急務である。近年、事前事後指導や実習での各学習項目の細かな内容や教授方法、評価などに関しても標準化された養成システムを開発しようとする機運が高まりつつある。しかし、**保育士養成の領域では、高い教育効果をあげる教育プログラムや教材開発をおこなうための系統的かつ実証的な基礎的研究や実践的研究はほとんどなされていないのが現状である。**

また、保育学生たちが実習そのものに大きな不安やストレスを抱えるようになっており実習での学習成果を書き留める「実習日誌を書くこと」も大きな負担となっている。実習日誌は、実習における学習を深める重要な課題であるだけでなく、将来現場で勤務する際に、さまざまな「記録」を書き、自らの実践を振り返って「考察」を深め、保育の質を向上させていくためにも大変重要な学習教材である。実習日誌によって、「記録」と「考察」のスキルを磨くのであるが、近年特に、現場で指導を担当する保育士から「日誌が十分に書けない」との指摘が増えてきた。そこで、実習での学習成果をあげていくためには、**実習日誌の記述力をより効果的に向上させる教育プログラムの開発が必要であるといえる。**

2. 研究の目的

本研究では、客観的手法を日誌の教授法に取り入れ、まず、実習日誌に記述されている内容について、その特徴を明らかにし、教育機関によって相違点が見られるか検討する（短期大学と四年制大学）。また、実習種別（保育所実習と施設実習）によって記述内容が異なるか検討する。

また、分析学習の教育効果を検討する。

3. 研究の方法

保育実習履修学生を対象に、自分自身の実習日誌の一日の感想を記述する箇所をよく読み、カテゴリに従って記述内容について分類を行った（以下、分析学習）。短期大学2回生（すべての保育実習履修済み）35名（F:M=27:8）、四年制大学生3回生（保育実習I（保育所実習および施設実習履修済み）20名（F:M=20:0）であった。

記述内容については、実習中の出来事について記述した箇所（以下、事実部分）と、それらの出来事について本人の意見、考えや感想を述べた箇所（以下、考察部分）に分け、それぞれを別の観点からカテゴリに分類した（Table 1 および 2）。事実部分のカテゴリは、実習場面の登場人物や対象を軸として、誰の/どんなことについて書かれた事柄（出来事）かによって、「こども」「保育者および保育」「実習生」「環境」「その他」の5つのカテゴリに分類した。また、考察部分では、どのように考えたか、考察の内容によって、「感想・気持ち」「理解・学習」「反省・展望」「その他」の4つのカテゴリに分類した。分類活動は、例題として見本の文章を作成し、例題のカテゴリ分類を行って、分類方法を習得したのち、本人の実習日誌について分類作業を行った。

分類結果については、各個人毎に、全文章で分類されたカテゴリ数の総数に対する、任意のカテゴリの出現率として、数値/グラフ化し、本人にフィードバックされた。

Table 1 事実部分の分類カテゴリ

大カテゴリ	下位カテゴリ
こども	行動・発達・個性・その他
保育者・保育	保育/援助・保育実技・
実習生	保育全般・その他
環境	時間/場所・活動内容/状況・その他
その他	その他

Table 2 考察部分の分類カテゴリ

大カテゴリ	考察の対象
感想・気持ち	こども・保育者/保育 実習生・環境・その他
理解・学習	
反省・展望	
その他	

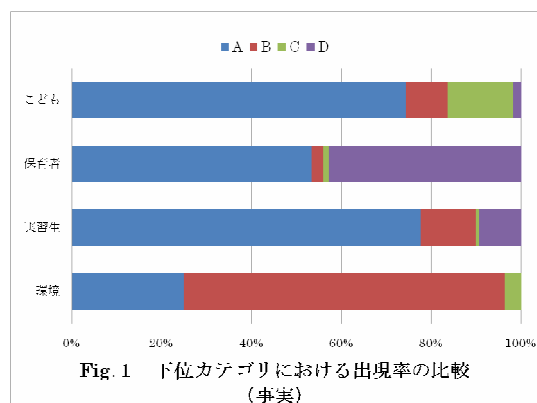
4. 研究成果

(1) 実習日誌の全般的記述傾向

日誌の感想部分の記述傾向として、事実部分と考察部分の比率は、若干事実を述べる箇所の出現頻度が高めだったが、大きな偏りはなかった。しかし、一方で事実を記述した箇所では、カテゴリにおける偏りはどの教育機関、および実習種別においてもみられた。事実部分では、おしなべて子どもに対する記述が多くみられた。また、個人による差が著しく多く見られた。

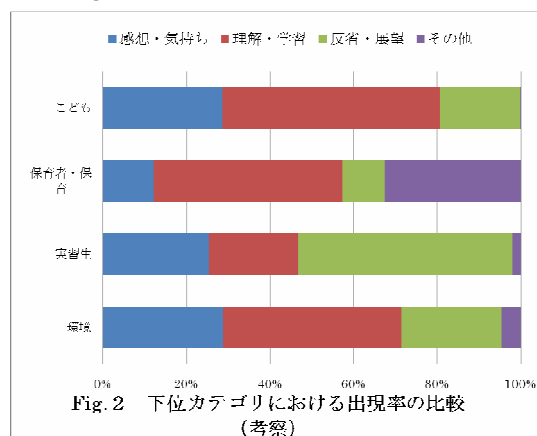
事実部分の下位カテゴリにおける出現率の比較では、子どもに関しては、子どもの行動についての記述が最も多く、発達についての記述が少なかった (Fig. 1)。保育者については、保育者子どもへのかかわり方 (保育や援助) についての記載と、その他 (先生への質問やお礼、挨拶など) の記述が多くみられたが、保育実技や保育観などについてはほとんど記述が見られなかった。実習生についても、同様に子どもへの直接的な関わりについての記載が80%を占めた。

以上のことから、子どもへの気づきという観点から、子どもの発達や個性 (内面性など) についての記述が少ないことから、発達への理解を深めることが今後の課題と言えよう。また、保育者に関しても、直接的な子どもとの関わりを多く捉えており、保育者の保育の考え方や配慮 (背景の保育観) を捉えることが困難であることが示唆される。



カテゴリ	A	B	C	D
子ども	行動	発達	個性	他
保育者	保育/ 援助	保育 実技	保育 全般	他
実習生	時間	内容	他	
環境				

次に、考察部分では、従来指摘されてきた「表面的な感想が多い」ことや「主観的な思いのみ書かれている」との指摘に対して、「感想・気持ち」の出現率は多くても30%程度であった。日誌に記載すべき対象 (子ども・保育者・実習生・環境) について、すべての種類の考察が書かれているが、対象によって若干出現率に違いがみられた。子どもや保育者、環境に関しては、実習体験から理解を深めたことが伺える。実習生に関しては、反省などの振り返りが記述される傾向がみられた (Fig. 2)。

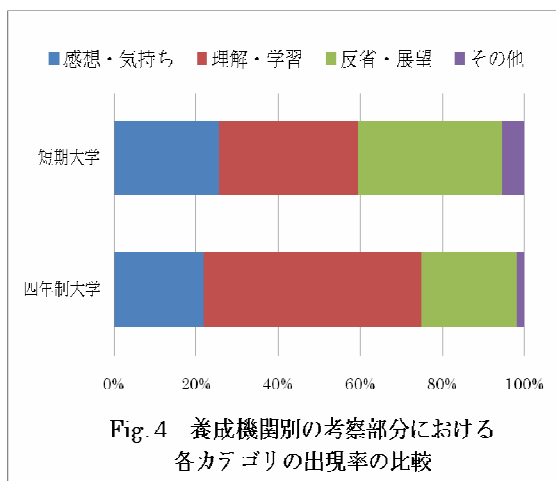
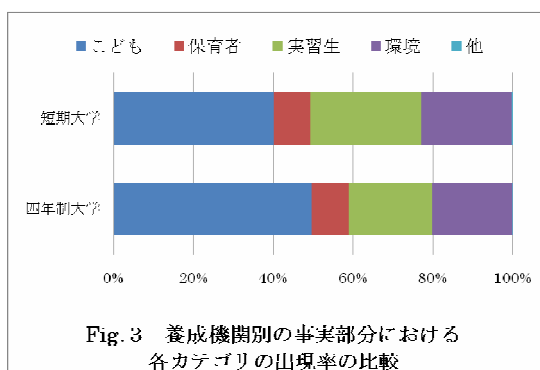


(2) 教育機関による差異

短期大学と四年制大学との記述傾向を比

較した結果、事実部分に関しては、子ども>実習生>環境>保育者の順で、出現率が高い傾向を示したが、「こども」カテゴリで出現率が大きく異なった (Fig. 3)

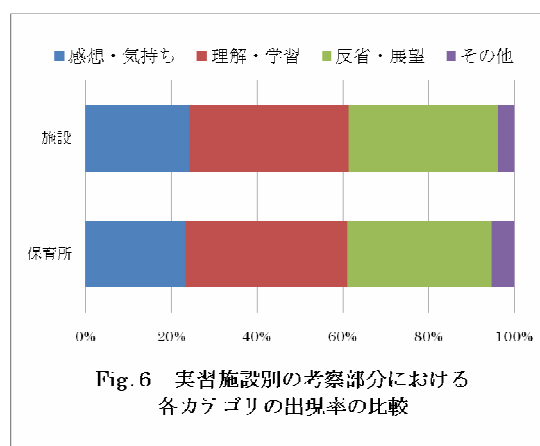
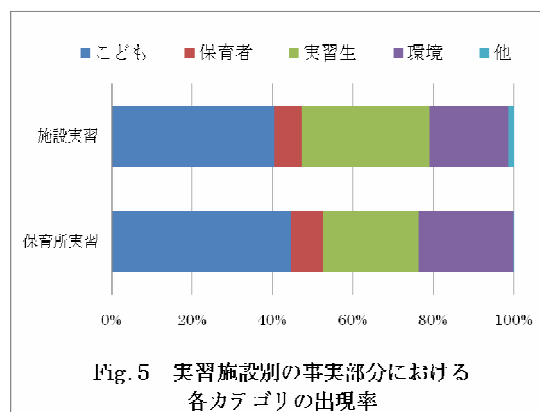
考察の部分では、出現傾向が大きく異なり、短期大学では、「反省・展望」が高く、四年制大学で「理解・学習」が著しく高くなった。短期大学と4年制大学では、初めての實習に出る時期が1年から1年半ほど異なり、四年制大学ではより長く座学を中心とした文章力を鍛える学習を積んでいることが背景にあるかもしれない (Fig. 4)。



(3) 実習種別による比較

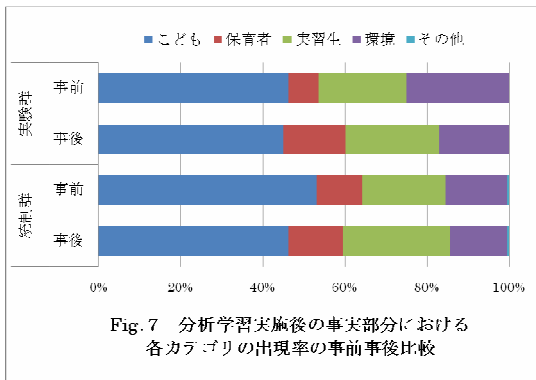
保育実習のカリキュラムでは、保育所で行う実習と、保育所以外の児童福祉施設で行う実習がある。そこで、実習施設による差異を検討した。その結果、事実部分で、若干の傾向の違いがみられたが、考察部分では、大きな違いは見られなかった (Fig. 5 と Fig. 6)。

今後、カテゴリの出現頻度だけでなく、内容の面からも分析を行う必要がある。



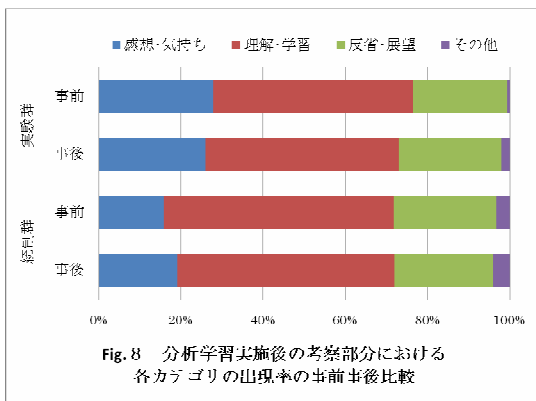
(4) 分析学習の教育効果の検討

四年制大学での取り組みにおいて、1度目の保育所実習と2度目の保育所実習の間の期間で、分析学習を実施した。その結果、実験群において、事実部分の記載傾向が、事前には、特に「保育者」についての記述が少ない傾向があったが、事後には統制群に比べて、「保育者」に関する記述が増加する傾向を示した。しかし、考察部分に関しては、事前事後による顕著な変化は見られなかった (Fig. 7 および Fig. 8)。



(2) 研究分担者

呉田 陽一 (KURETA YOHICHI)
 昭和大学・富士吉田教育部・講師
 研究者番号：60321874



分析学習の結果、客観的事実として自分自身の記述傾向をグラフによって、視覚化してとらえることで、学生たちは一様に気付かなかった自分の文章傾向を認識できた。このような視覚化された認識では、事実に関する記述には、教育効果を示すことが比較的容易かもしれないが、考察のような「考え方」を変容していくには、あまり効果的でないのかもしれない。

また、今回分析学習を、教育実践として実施したが、かなり手間と時間がかかり、保育者養成課程にある学生たちにとって、負担の高いものとなった。今後、より簡便な教材を開発し、教育効果を高める手法を開発することが必要だ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

権藤 真織 (GONDO MAORI)
 神戸親和女子大学・発達教育学部・講師
 研究者番号：90413426